

視点 (973)

テンプレトンの遺言とは!!

アメリカのサブプライムローンを原因とする経済不況が全世界に波及しています。日本も1980年代後半からバブル経済に突入し、1991年にバブル経済が崩壊して、その後15年間(1991~2006年)は、失われた経済の時代と呼ばれています。バブル経済とバブル経済の崩壊は、世界経済の歴史の中で、くり返し起こっている出来事です。フランス、オランダ、イギリス、アメリカ、日本...等の先進国家はすべて、バブル経済とバブル経済の崩壊を味わっています。それゆえに、バブル経済の崩壊を味わえる国は、逆に言うと、経済的に大発展し恵まれた国のみです。すなわち、経済が大発展して、過剰に行きすぎた状態がバブル経済であり、その過剰分がバブル経済の崩壊の原因となります。問題は、バブル経済崩壊後の処理と回復スピードと対応プロセスです。バブル経済崩壊を克服し回復した国はその後、さらなる経済発展を遂げます。逆に、回復せずに経済が弱体化して後発国に追い抜かれた国は、長期低落化の道を歩むこととなります。1929年のアメリカ発世界大恐慌では、その後のアメリカはバブル経済の崩壊を克服して大発展しました。しかし、アルゼンチンはバブル経済の崩壊後、長期低落化の道を歩み後進国になってしまいました。

日本は1991年のバブル経済崩壊を味わった後、再生して大発展する道を歩むのか、長期低落化の道を歩むのかの瀬戸際です。

私は、日本の経済は底力があると信じ、“ガンバレ日本経済”を10年前から訴え、日はまた昇ることを確信しています。

このバブル経済とバブル経済の崩壊の経済現象は、定期的にくり返し起こっています。この現象について「ジョン・テンプレトン」(2008年7月、95年の生涯を終えた米国の大物投資家)は、株式相場の格言を残しています。

それは「今回は違う」(This time is different)です。

以下「一目均衡・編集委員 梶原誠氏」(日本経済新聞・2008年9月30日より)を紹介します。

テンプレトンが戒めた「今回は違う」という風潮は、バブル崩壊の初期に広がる。崩壊の怖さを知っているのに、いざ直面すると事実を認めたくなくなる投資家の希望的な心理だ。「銀行が損失を隠し続けた日本とは違う」。4月、米議会で90年代の日本の金融危機との比較を問われたバーナンキ米連邦準備理事会(FRB)議長の発言だ。この油断が対応の遅れた伏線ではなかったか。

ウォール街の教訓は興味深い。曲が流れる以上、踊らなければいけない。我々はまだ踊っている。踊っていなければ市場シェアを失って、取り返しがつかなくなる懸念が強かった思える。

テンプレトンは、市場心理の浮き沈みを説明する名文句を残した。「強気相場は悲観の中に生まれ、懐疑の中で育ち、楽観の中で成長し、陶酔の中で消えていく」。大恐慌、世界大戦、そして数々のバブルと崩壊を知るテンプレトンの遺言。

激動の今こそ輝きを増す。

格言の中に「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という言葉があります。バブル経済とバブル経済の崩壊は、歴史上くり返しくり返し起こっております。このくり返される歴史上の出来事を正しく解明するためには、自らの少ない経験からではなく、過去に起こった歴史上の現象をメカニズム的に解明することが必要です。

今、起こっている現象を歴史上の事実と比較してメカニズム的に分析し、解析すると、「何が起こっているのか」「その原因は何か」「今は、どのレベルなのか」「今後どうなるのか」「どのような手を打てば良いのか」等の先が見えてきます。我々も、多くの先輩の格言を重んじ、同じ失敗をくり返さないようにしたいものです。

(株)ダイナミックマーケティング社^{*3}
代 表 六 車 秀 之